家庭数配付

さいたま市立宮原小学校
学校だより

令和 6年 9月30日 第7号

学校教育目標　心身ともに健やかで主体的に生きる子どもの育成

・たがいに努める子（やる気）・たがいにきたえる子（元気）・たがいに手をとる子（勇気）

弘法筆を選ばず

井　上　　雅　史

2学期が始まりひと月が過ぎ、急に涼しくなってきました。急激な気候の変化に体調を崩すことが心配されます。皆様どうぞご自愛ください。

さて、小学校では3年生から毛筆を使った学習を行います。毛筆で文字を学ぶ時間は、一般的に「習字」や「毛筆」と呼ばれますが、小学校の授業で行うのは「書写」です。「書写」とは、文字の形を整え、手本に忠実に正しく書く学習です。「国語科」の授業の一部として取り扱っています。一方、高校生になると「書道」は芸術教科となり、「臨書」という学び方に取り組んでいきます。

私は「書道」のことに詳しくないので、書道好きの家族に「臨書って何？」と聞いてみました。すると「古典を写すこと」という、とてもシンプルな答えが(やや強めな口調で)返ってきました。シンプルすぎて「書写」との違いがよく分からないという顔をしていたら「古典てさ、石碑に掘られたものだったりそれを写したものだったりするから、筆で書いた形が細かいところまではっきり残っていないことが多いんだけど、それをどうなっているか自分なりにいろいろ考えて書の作品を完成させるんだよ」と付け足しがありました（この説明が正確かどうかは…ご容赦ください）。私自身は書道をやった経験がないので、今一つピンときません。続けて「じゃあ弘法大師とかが残した古典を書いたりするの？」と質問したのです。「弘法も筆の誤り」や「弘法筆を選ばず」の諺から、私でも弘法大師が書の大家であることは知っています。でも、家族にとっては頓珍漢な質問だったのか、失笑されて会話は終わりました。（何がいけなかったのかいまだに分からないのですが…）

上に挙げた諺「弘法筆を選ばず」ですが、その意味は皆さんもご存じでしょう。私も知っているつもりでしたが、改めて確認をと思い調べてみました。すると、ある辞書では「本当の名人は道具の良し悪しに関わらず立派な仕事をすること」と解説しています。ネット上の記事では「書く道具や筆の種類にこだわることなく、自分の才能や技術を発揮することが大切だ」と解説しています。また別の記事では「本当の名人は道具の良し悪しにとやかく言わず見事に使いこなすということ」となっています。いずれも「道具の状態にかかわらずに力を発揮する」ことは共通しますが、これらの解説は少しずつ異なること（行動、心構え、能力）について言っているように感じました。

いろいろな解説があるならば、これらの解説とは違う視点で考えてみても面白いのではと思い、今回はこの諺を、勝手に井上流の解釈をしてみました。それは「どんな道具を与えられても、その道具の一番良い使い方を自分で見つけ、すぐ実行できるので、その道具を使った最高の作品（結果）を残せる」という考え方です。書で例えれば、ある筆を持った時に「この筆は、草書の作品づくりに適している」と判断して草書の立派な作品を仕上げ、別の筆は「楷書の作品に向いている」と判断して楷書の最高の作品を仕上げる。つまり道具を見て手に取った時に、その道具の最高の活かし方を考え実行できる能力を身に付けた状態が「弘法筆を選ばず」だという考え方です。

これはあくまでも私の勝手な解釈です。しかし、実際にどの分野でも熟練の技を持った方々は、このような境地にあるのではないでしょうか。その境地に達するまでには長い年月を要したと思います。「臨書」を繰り返すようにそれぞれの分野の本物から学び続け、一心に自らの技術を磨いてきたことで、その分野の本質を深く理解するまでに至ります。この本質を深く理解していることが「弘法筆を選ばず」の状態なのだと私は考えます。

熟練の域に達することは並大抵ではありませんが、それまでの過程には我々の学びや生活を豊かにするヒントがあると思います。それは「臨書」のように本物に触れることです。

季節は秋になりました。「〇〇の秋」ぜひ様々な分野の本物に触れみてはいかがでしょうか。